

病む人の気持ちを

本田 浩

「荊棘の道と知りつつわけ入りし この荊棘の道を愛したまひき」

この短歌は、九州大学医学部放射線科 第2代教授の入江英雄先生が、教室を開講された初代教授中島良貞先生のご苦労を読んだものである。昭和4年、一旦は閣議決定された新講座の開設は政友会田中義一内閣の総辞職、新たに成立した民主党浜口雄幸内閣による極度の財政緊縮政策により予算措置が破算となった。中島先生は、苦肉の策として、当時の貝島炭坑株式会社 社長貝島太市氏より頂戴していた10万円の寄付金のみで、国立大学で初めての放射線教室を昭和4年12月18日付けで開講し、初代教授に就任した。中島教授は当時を振り返り、「放射線科は何をする所であるか、世間の人は全く知らない状態で、治を求めて外来に来る患者は殆ど皆無という有様だった。放射線学として切り開いて行くべき未墾の沃野は、研究方面にも診療方面にも渺茫たるものがある。しかし、今生まれ出たばかりのこの教室を如何なる方面に特徴づけて如何に発展せしめていくか、私にとって重大課題であった。」と話されている。その後も新しい診療科であるが故に歩まざるを得なかった苦難の道程を、中島教授は「荊棘の道」と表現された。中島教授の後を継いだ第2代教授入江英雄先生の時代も放射線科の黎明期から発展期であったが、それはやはり「荊棘の道」であった。学問の道はいずれの分野においても、「いばらの道」なのかもしれないが、学問以外でのご苦労も偲ばれる短歌である。教授室正面に、入江先生直筆の額を掲げて、常に気持ちを新たに教室運営に取り組んでいる。

この「荊棘の道」と並んで、あるいはそれ以上に、教室員の一人ひとりの胸に刻まれている言葉が、「病む人の気持ちを」である。(入江先生の書では「病む人の気持ちを」となっているので、座右銘にはこれを用いた。)これは入江先生の座右銘であったものだが、今では九州大学放射線科の教室員ならびに同門会員全員の座右銘となっており、歴代教授の写真とともに、入江先生の書を医局に掲げている。この言葉は、それぞれの立場によっていろいろな意味を持ち、奥行きが深い。医師は患者の身になって最高の医療をすることだと受け取り、家族は患者の身になって暖かくいたわることだと解釈するかもしれない。人それぞれに違ってよいと思う。教室員の中でさえも、それぞれに受け止め方が異なっているだろうが、この言葉は医療人として常に抱くべき情念であり臨床哲学だと理解している。

私自身は、3代目教授の松浦啓一先生の門下生であり、入江先生にお会いしたのは2度しかない。初めてお会いしたのは、松浦教授主催の第40回日本医学放射線学会総会の機器展示会場であった。研修医2年目であった私は、医局長にご紹介いただいた上で、医局長とともに展示会場をご案内した。ご案内が終わって、入江先生は謝辞を述べられた後、私へ顔を向けられ「どこの薬屋さんかな？」と優しく尋ねられた。握手をしていただいたが、大きくて、とても柔らかい手であった。これまでに多くの方々と握手をしたが、なぜか鮮

明に記憶している入江先生の手である。

「荊棘の道」は医学者あるいは放射線科学者としてのあるべき道を、また「病む人の気持ちを」は医師としてのあるべき姿を示している。医学は自然科学であるから、それそのものとしては冷厳であろう。「荊棘の道」なのかもしれない。しかし、その成果を患者に施す医師の精神は、人間的な温かみあふれた人道的なものでなければならない。「医は仁術」でなくとも、「医師は仁者」でなければならない。放射線医学は驚くほどの勢いで進歩してきた。その渦中に身を置けたことを幸せだと思うが、この発展の上にさらに進歩していく放射線医学の道にわけ入る若き放射線科医諸君を羨ましくも思う。その進路を阻んでいた「荊棘の道」は、それに携わり乗り越えてきた人々の努力の結晶として、今では育成のために試練を与える「荊棘の道」へと変化したのではないだろうか。一方、「病む人の気持ちを」の精神は、医療がある限り普遍である。この医師の精神は、時間、場所、人種、社会体制や医療制度の相違を超えた人間共通の精神である。そこで重要なことは、医師の人間精神、人間愛を自由にふるえるための条件づくりである。医師が持つ人間愛を自由に具現し得るためには、豊富な知識や優れた技術を身につけるための努力とそのための教育を怠らないこと、そのことを教えてくれる二つの言葉である。

この二つの言葉を掲げて放射線医学の道を開拓してきた教室のひとりであることは喜びであり誇りでもある。これらの言葉のもつ意味を後進に伝えていくことが、我々の務めだと思う。